# ベンはアンナが好き

ペーター＝ヘルトリング作　上田真而子訳

**作者／ペーター＝ヘルトリング**

1933年南ドイツに生まれる。新聞や雑誌の記者を経て，小説を書き始め，現在西ドイツで最も人気のある作家の一人。社会問題をテーマにした児童書を書いて注目されている。

**訳者／上田真而子**（うえだまにこ）

広島に生まれる。マールブルク大学で宗教美術史を学び，現在はドイツ児童文学の研究をしている。主な訳書に「あのころはフリードリッヒがいた」「おばあちゃん」などがある。

**ベンはアンナが好き** © Maniko UEDA 1983

作者　ペーター＝ヘルトリング
訳者　上田真而子
発行　1983年10月初版1刷
発行者　今村廣
発行所　東京都新宿区市ヵ谷砂土原町3—5　**偕成社**
印刷・製本　中央精版印刷
NDC 943　150p　19cm　ISBN4-03-726230-4

Published by KAISEI-SHA, Ichigaya Tokyo 162
Printed in Japan.
落丁本・乱丁本はおとりかえします。

# ベンは アンナが好き

ペーター=ヘルトリング作　上田真而子 訳

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

BEN LIEBT ANNA
by Peter Härtling & ill. by Sophie Brandes
© Beltz Verlag 1979
Originally published by Beltz Verlag, Weinheim & Basel
Japanese translation copyright © KAISEI-SHA Co., Ltd. 1983
arranged through Japan Uni Agency, Tokyo

さし絵　ゾフィー＝ブランデス

# はじめに

これはまえがきではない。なぜわたしがベンヤミーン＝ケルベルとアンナ＝ミチェクの物語を書くのか、そのわけをちょっとのべてみようと思うだけである。

おとなは、子どもにむかって、よくこういう。おまえたちには愛なんてまだぜんぜんわからない。それはおとなになってはじめてわかるのだ、と。

そういうとき、おとなは、たくさんのことをわすれてしまったか、きみたち子どもとは話したくないか、それともそらとぼけているかだ。

わたしは、七歳ではじめて女の子が好きになったときのことを、よくおぼえている。その子は、ウラという名だった。ウラは、この本のアンナではない。けれども、アンナの話を書きながら、わたしはウラのことを思ってもいる。

ベンは、いっとき、アンナがとても好きだった。そして、アンナもベンが好きだった。

ペーター＝ヘルトリング

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# もくじ

ベン、質問をする　6
アンナは転校生　14
ベルンハルトのおしりが ないたわけ　26
ホルガー、つげ口をする　40
アンナの すんでいるところ　47
ベン、アンナに手紙を書く　58
アンナのかわりに ベルンハルトを　64

アンナ、返事を書く　78
ベン、おめかしをする　89
もつ料理と　アンナのかくれ家(が)　96
アンナがやってきた　107
アンナとベン、水あびをする　121
ベンは　アンナが好(す)き　134
アンナ、ひっこしていく　143
訳者あとがき　149

# ベン、質問をする

「鼻に指をつっこむんじゃないの、インディアン。」

と、かあさんがいった。ベンが鼻くそをほじくっていると、かあさんはいつもそういう。そのたびに、ベンは、インディアンが鼻くそをほじるところが出てくる話なんて、まだ読んだことがない、と思う。かあさんはインディアンのことを、だいぶ思いちがいしているんだ。ベンは気にかかることがあると、よく鼻くそをほじくりながら考える。かあさんだって、それを知っているのに。あーあ、じゃまされてしまった。

「なにを考えていたのか、わすれちゃったじゃないか。」

ベンはもんくをいった。

「それなら、あまりだいじなことじゃなかったんでしょ。」かあさんはいった。「それに、もうすぐ十歳にもなる人が、鼻をほじったりするものじゃないのよ。」
「ぼく、五十歳でもまだやってる人、知ってるよ。」
「あら、うそばっかり。」
「ゲルハルトおじさんさ！」
かあさんは、くるっとむこうをむいた。笑っているんだ。ベンにはわかっている。それなのに、かあさんは、すぐにまたこわいようすをしてみせた。けれどもそれがうまくできなくて、つくえの上にあった塩のつぼをひっくりかえしてしまった。
「そんなこと、かるがるしくいうものじゃないの。」かあさんはいった。
「だってほんとだもの、グレーテ。」
ベンはこたえた。ベンとホルガーは、かあさんをグレーテとよぶ。とうさんはかあさんを、グレーテルという。
「口ごたえばかりするのね。」と、かあさん。

ベンは首をふって、いった。
「いつかとうさんにいってたじゃないか、ゲルハルトおじさんは子ぶたみたいにきたないことがあるわねって。あんな年とった子ぶたなんて、いるはずないのにさ。」
ベンの勝ちだ。かあさんはため息をつき、つくえの上のスープ鉢をかたづけながら、声の調子をがらりと変えた。まじめなんですよといいたいとき、いつも、そうする。
「さあ、ぐずぐずしていないで、さっさと宿題をなさい。ホルガーにいさんが帰ってきたら、見てもらうんですよ。」
ホルガーは十三歳になるにいさんで、たいしてがんばりもしないのに、学校ではエース、ベンとは大ちがいだ。かあさんは、ベンはなまけものだと思っている。いつもそうというわけでもないのに。とはいうものの、がんばってみても、試験はどうもうまくいかない。
いま、かあさんはいそいでいる。お医者のヴェンツェル先生のところにいかなければならないのだ。そこで、午後、助手としてはたらいている。

「すぐはじめるのよ。」

そういいのこして、とびだしていった。

ベンは、すぐにははじめない。まず、ポカンとして空中の大きな穴をながめた。それから、じぶんのへやにいって、絵がいっぱいの動物図鑑をだしてきた。それから、雌モルモットのトゥルーディにえさをやった。それから、またつくえにむかった。それから、算数のノートと教科書をかばんからとりだした。それから、それをひらいた。それから、万年筆を鉛筆とインク消しにならべておいた。それから、ぼんやりした。それから、靴をぬいで食器戸棚の下にけりこんだ。それから、また鼻くそをほじった。それから、やっとこさ、算数をはじめた。

問題がいつもよりずっとむずかしいように思えた。きっと、頭がほかのことでいっぱいだからだろう。

アンナのことばかり思うので、計算ができないのだ。ベンはじぶんに腹がたった。けれども、またしてもアンナのことを考えている。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

じぶんでは、アンナのことを考えようとは、ぜんぜん思っていない。算数の勉強に集中したい、そのほうがいいと思っている。ほかにはなにも思っていない。それなのに……。

ホルガーが帰ってきたとき、ベンはまだ最初の問題もできていなかった。ホルガーはいいにいさんだ。弟のめんどうをよく見てくれる。ベンは、どう計算すればいいのか、またわかりはじめた。問題はどれもたいしてむずかしくはない。頭のなかでアンナと算数がごじゃまぜになると、解けなくなるだけだ。

宿題が終わったとき、ベンが小さい声できいた。

「ねえ、ホルガー、女の子が好きになったら、どうなるの？」

ちょうどじぶんのへやにいきかけていたホルガーは、ぴたりと足をとめた。そして、もどってきた。息をつめている。しばらくして、いった。

「おい、寝言いってんのか、ちび？」

ホルガーは、兄きかぜをふかせたいとき、きまって、ちびとよぶ。

ベンはくちびるをぎゅっとむすんだ。
ホルガーはまずいことをいったと気がついて、ベンの肩に手をかけた。
「いや、ちょっといってみただけなんだよ。おまえ、ほんとにほれたのか？」
ホルガーはたずねた。
ベンはうなずいた。もうなにもいえない。いえばホルガーにからかわれるだけだ。
「おれの知ってる子かい？」
ホルガーがたずねた。
「ちがう！」まるで、さけび声だ。
「いいかい。」ホルガーがいった。「女の子が好きになるとね、その子のことばっかり考えるようになるのさ。そして、なんかこう、おなかがいたくなるみたいだな。ほんとだぜ。」
ほんとうだ、ホルガーのいうとおりだ。ベンは、おなかがつっぱるような気がした。それとも、胸か。それとも、あちこちぜんぶがちょっといたいような気持ちだ。そう思

うだけかもしれないけれど。
ベンはいすをぐいとひいて、ホルガーのひざにぶつけた。
「いたい！」ホルガーがさけんだ。「こいつ！　なんだよ。なきだしそうになったかと思や、こんどは……」
「ほっといて。」
ベンはそういうと、大いそぎでノートと本と筆箱をかきあつめ、つくえの上からかばんをひったくって、じぶんのへやにかけこんだ。そして大きな音でレコードをかけ、わっとなきそうになるのを、歯をくいしばってがまんした。
ほんとうは、またホルガーのところにいきたかったが、けんかをしたから、もういけない。ベンはモルモットのトゥルーディを箱からだして、なでてやった。トゥルーディはとくべついい気持ちになると鳴きはじめる。いま、トゥルーディは鳴いた。

# アンナは転校生

アンナが転校してきたのは、四年生のはじめだった。ある朝、担任のザイプマン先生が、アンナをさきにたててはいってきて、いった。

「きみたちのあたらしい同級生、アンナ＝ミチェクくんだ。なかよくするんだよ。アンナは半年まえにドイツにきたばかりなんだ。それまでは、おとうさんやおかあさんといっしょに、ポーランドにいた。」

アンナは、なにもかも変だった。

ジーンズをはかず、古めかしい、長すぎるワンピースを着ていた。髪はひとつにたばねて三つあみにしていたが、これも長すぎた。顔色がわるく、やせて、音をたてて鼻を

すすった。

ベンは、なんていやな女の子だろうと思った。

何人かが、くすくす笑いだした。

「なんだ、きみたち、その態度は。」

ザイプマン先生がいった。先生はアンナをカーチャのとなりにすわらせた。カーチャはすぐさまちょっとよって、アンナとのあいだをあけた。アンナは、なにも気がついていないふりをした。

あんな子、ぼくたちのクラスにくるの、いやだなとベンは思った。そして、もういちどじろじろながめてみた。すると、アンナが顔をあげてベンをじっと見つめた。ベンはぎくっとした。アンナはとても大きな茶色の目をしていたが、それはおそろしく悲しそうな目だった。そんな目を、ベンはまだ見たことがなかった。なぜ悲しそうな目だと思ったのか、ベンにはわからなかった。ベンは考えた。あんな目をしちゃいけない、人を心配させるじゃないか、と。ベンは目をそらせた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c